

資料：環境教育セミナーなどの概略史

木俣 美樹男

Archives of Environmental Education Seminar since 1984

Mikio KIMATA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

環境教育セミナーは不定期に開催する公開の学習会として1984年11月から始め、当初は野外教育セミナーと称し、東京学芸大学附属農場と自然文化誌研究会冒険探検部との共催で第6回まで実施していた。その後、附属農場は文部省令による附属野外教育実習施設になったが、そのまま、自然文化誌研究会冒険探検部との共催でセミナーは継続してきた。

途中(1986～1989年)には、野外教育シンポジウムを開催し、日本環境教育学会の創立準備を進めたために、セミナーは中断した。同学会の創立後、第7回(1990年7月)からは環境教育セミナーと改称して再開し、2013年4月現在、第33回環境教育セミナーの準備を進めているところである。

附属野外教育実習施設は環境教育実践施設に改組、現在は環境教育研究センターに改称している。自然文化誌研究会冒険探検部も変遷はあったが、現在は特定非営利活動法人自然文化誌研究会(東京都認証)と称しており、環境教育セミナーは今日まで共催してきている。

第1回 野外教育セミナー

1984年11月 都市における農業教育
明峰哲夫(やほ耕作団)

共催：東京学芸大学附属農場、自然文化誌研究会冒険探検部

第2回 野外教育セミナー

1985年2月 ものづくり学習
小島靖子(八王子養護学校)

共催：東京学芸大学附属農場、自然文化誌研究会冒険探検部

第3回 野外教育セミナー

1985年5月 農業教育の必要性
(アジア学院)

共催：東京学芸大学附属農場、自然文化誌研究会冒険探検部

第4回 野外教育セミナー

1986年 野外教育について

石岡信(日本野外教育研究会)

共催：東京学芸大学附属農場、自然文化誌研究会冒険探検部

第1回 野外教育シンポジウム

期日：1986年6月28日～29日

場所：東京学芸大学

主催：野外教育シンポジウム準備会

協賛：(社)青少年交友協会・野外文化研究所、(財)農村開発企画委員会、日本野外教育研究会、環境教育研究会、東京学芸大学自然文化誌研究会・冒険探検部

プログラム：

・準備会挨拶

◎6月28日「学校教育・社会教育における野外教育活動」

1) 学校周辺のネイチャ・トレイルの活用：中込卓男(五日市町立戸倉小学校)、座長＝河口徳明(千葉大学大学院理科教育専攻)

2) 社会教育における子供の自然接触のありかた：柴田敏隆(日本野外教育研究会)、座長＝山田卓三(兵庫教育大学生物教室)

3) 総合討論 座長、榊原雄太郎(東京学芸大学理科教育教室)

◎6月29日「海外における子供の野外文化活動」

- 4) インドネシアにおける子供の野遊び：ジュハナ・スプリアジ・マリアジナタ（一橋大学大学院地理学専攻）、座長＝深野和彦（青少年交友協会）
- 5) 野外文化の子供への伝承のありかた：森田勇造（青少年交友協会）、座長＝石川英夫（財・農村開発企画委員会）
- ・ 野外教育施設の見学
- 6) 総合討論：座長＝北野日出男（東京学芸大学生物学教室）

第2回 野外教育シンポジウム

期日：1987年6月14日

場所：大阪教育大学

主催：野外教育シンポジウム準備会

協賛：(社) 青少年交友協会・野外文化研究所、(財) 農村開発企画委員会、(財) 森とむらの会、環境教育研究会、日本ナチュラリスト協会、ナチュラリスト環境教育センター、東京学芸大学自然文化誌研究会・冒険探検部

プログラム：

- ・ 準備会挨拶
- 1) 学校の歴史的変遷と現状について～千葉県の小学校を中心として～：河口徳明（三重県南島町立島津小学校）
- 2) ちえおくれの子供たちの農場実習：綾部捷（大阪教育大学附属養護学校）
- 3) 新しい野外教育のめざすもの 社会教育における野外活動～大阪府の事例を中心に～：立沢史郎（大阪教育大学大学院理科教育専攻）
- 4) 野外教育シンポジウムの発足の経緯：木俣美樹男（東京学芸大学）
- 5) 自然は自然から学ぶ：水野寿彦（大阪青山女子短期大学）
- ・ 総合討論
- ・ 野外教育シンポジウムの発足の経緯（図1）

第3回 野外教育シンポジウム

期日：1988年6月5日

場所：愛知教育大学第2共通棟 422室

主催：野外教育シンポジウム準備会

プログラム：

野外教育シンポジウム発足の経緯

木俣美樹男（東京学芸大学）

1. 野外教育とは何か？
 - 野外教育研究会の概念
 - 1) 体育に関連をもつ野外活動の領域
 - 2) 自然および自然と結びついた文化から学ぶ領域
 - 3) 農山漁村において自然に働きかける領域
 - 森田（1979）の概念
 - 1) 自然と生活（自然観察、農林水産業体験、野外生活）
 - 2) 野外運動（長距離歩行、野外遊び）
 - 3) 歴史と伝統（祭りや年中行事、地域調査）
 - 斎藤（1972）の概念
 - 1) 安全教育
 - 2) 道徳教育
 - 3) 作業教育
 - 4) 自然学習
 - 5) 芸術教育
 - 6) 体育・スポーツ
 - Y M C A のポイント ボニタ 野外センターの概念
 - 1) 自然誌学習活動（地誌、生態学、野性生物）
 - 2) 文化誌学習活動（インディアン、探検家、移民）
 - 3) 野外活動
 - 4) 芸術活動
2. 東京学芸大学野外教育実習施設の概要
 - 設置の柱
 - 1) 自然と人間との歴史的関係の野外教育法に関する分野
 - 2) 野外教育を実践する施設・設備およびその利用法に関する分野
 - 3) 野外教育教材の開発・系統保存・供給に関する分野
 - 研究業務
 - 1) 野外教育研究部門
 - 2) 野外教育教材研究部門
 - 3) 野外教育施設研究部門
 - 4) 自然認識研究部門
 - 5) 自然表現研究部門
 - 教育普及業務
 - 1) 学部学生向け実習・講義
 - 2) 附属学校園向け体験学習
 - 3) 現職教育および生涯学習
 - 4) 課外教育
3. 野外教育をめぐる状況
 - 環境教育研究会
 - 育てる会、青少年交友協会、自然保護協会、ナチュラリスト協会
 - 森とむらの会、農村開発企画委員会、農村生活総合研究センター
 - 臨時教育審議会（自然体験学習、山村留学、生活科）
4. 野外教育シンポジウム発足の経緯
 - 契機
 - 目的 自由な討論、ネットワーク作り

図1 (出典：第2回野外教育シンポジウム講演要旨集)

- ・ 準備会挨拶
- 1) 自然の特質にあった自然教育：渡辺隆一（信州大学志賀自然教育研究施設）
- 2) 愛知県における自然観察会の事例：中西正（愛知県立成章高校）
- 3) 現代の若者たちの生活体験～生活体験に関するアンケート調査から～：北川尚史（奈良教育大学生物学教室）
- 4) 見て見ないふりの自然学習のすすめ：山田卓三（兵庫教育大学生物学教室）
- 5) 養護学校における農耕文化の基本複合の学習：宮本透（東京学芸大学附属養護学校）

- 6) 生物教育と農業 そして野外教育：岩田好宏（千葉県習志野市立習志野高等学校）
 - 7) 人々のくらしと自然～都市の自然を探る、高校理科教育の実践より～：山岡寛人（東京大学附属中・高校）
 - 8) 体育の立場からの野外教育：東原昌郎（東京学芸大学体育教室）
 - 9) 授業における野外観察：庄司裕志（名古屋市立御園小学校）
- ・閉会挨拶
 文献：第三回野外教育シンポジウム報告（1988.6.5）

第5回 野外教育セミナー

期日：1988年12月3日
 場所：東京学芸大学第四部会議室
 からだ・ことば・イメージの授業：鳥山敏子（中野区立桃園第二小学校）
 山村留学と子どもの成長：青木孝安（財団法人育てる会）

第6回 野外教育セミナー

期日：1989年5月20日
 場所：東京学芸大学第四部会議室
 後援：日本環境教育学会準備会
 東南アジアの環境問題と日本との関わり：村井吉敬（上智大学外国語学部）
 環境教育の国際的動向：橋本詔子（環境庁環境教育専門官）

第4回 野外教育シンポジウム

期日：1989年6月10日～11日
 場所：長野県山ノ内町志賀高原
 主催：野外教育シンポジウム準備会
 後援：信州理科教育研究会、信濃教育会
 プログラム：
 ・準備会挨拶
 ◎6月10日 自然案内
 1) 野外教育、長野県の現状と問題：倉田稔（信州大学附属松本中学校）
 ◎6月11日
 1) 新しい保育を求めて：草刈広一（山形県、

- 共に育つ会）
 2) 自然保護教育における原体験の位置：湊秋作（和歌山県熊野川小学校）
 3) 中学校での野外教育活動の試み：滝崎吉伸（愛知県東陽中学）
 4) 地域自然史教育としての野外教育を考える：岩田好宏（千葉県習志野高校）
 5) 環境教育としての冒険学校：瀬谷勝頼（東京学芸大学自然文化誌研究会・冒険探検部）
 6) 奈良公園の芝生の植生：北川尚史（奈良教育大学）
 7) アメリカの大学における野外教育：川村協平（山梨大学）
 8) 自然環境教育の構想：細山田三郎（鹿児島大学）
 9) 環境教育学会の創立に向けて：木俣美樹男（東京学芸大学）
 10) 総合討論
 文献：第4回野外教育シンポジウム（1989）

第5回 野外教育シンポジウム

期日：1990年5月18日
 場所：東京学芸大学芸術館
 主催：日本環境教育学会準備会
 テーマ：野外で行う環境教育
 プログラム：
 ・準備会挨拶
 1) 花山キャンプでの試み：飯田稔（筑波大学）
 2) キープ協会におけるエコロジーキャンプ：川嶋直（キープ協会）
 3) 戸倉小学校における愛鳥活動：中込卓男（東京都五日市町立戸倉小学校）
 4) 野外教育センターにおける自由キャンプ：羽場睦美（野外教育センター）
 司会＝進士五十八（東京農業大学）、渡辺隆一（信州大学）

【関連集会】日本環境教育学会創立大会：環境教育の創造と実践

期日：1990年5月19日～20日
 場所：東京学芸大学芸術館
 主催：日本環境教育学会準備会

プログラム：(図2)

・準備会挨拶

◎5月19日 シンポジウム「今、求められている環境教育とは」

- 1) 都市の市民からの視点：川口啓明(科学ジャーナリスト)
- 2) 冒険から生まれる体験教育：木谷尚文(日本アウトワードバウンド協会)
- 3) 大自然の中で地球の詩を歌おう～北の大地で通年の月例自然教室を実践して～：三浦国彦(北海道旭川春光台中学校)
- 4) 社会科における環境教育：山下宏文(東京都品川区立第二延山小学校)

司会＝本谷勲(東京農工大学)、福島達夫(日本福祉大学)

・懇親会

◎5月20日 一般講演

記念講演：野生動物と環境～21世紀を共に生きるために：中川志郎(都立上野動物園)

・総会

・展示

・事務局長報告

第7回環境教育セミナー

期日：1990年7月14日

体験学習における環境の意味：小川博久(東京学芸大学)

体験学習と生活科：中野重人(文部省教科調査官)

第8回環境教育セミナー

期日：1990年10月27日

子供の生育環境とからだの発達：小野三嗣(東京学芸大学)

第9回環境教育セミナー

期日：1990年11月24日

農山村は教育にとっていかなる意味を持つか：吉田良一(エコライフ研究所)

日本環境教育学会準備会実行委員会報告要旨

I. 準備会の発足

日本環境教育学会を創立しようとの気運がありながら、それを現実のもととする動きが長い間見あたらなかった。そこで、1988年初夏に関東周辺の環境教育に携わってきた若手・中堅層の人々によって学会創立の契機とするための準備会を始めることになった。当初の基本的な準備活動の精神は、①数多くの多彩な方々の参加を得て、広く意見を集約するために準備期間を長くとること、②創立される学会は組織としては中立の立場を維持し、自由・活発な議論の展開を保障すること、③国内外に大きなネットワークを形成することであった。この精神に従って、学会創立呼びかけ人・準備会および賛同団体を広く募ることになった。

II. 世話会の活動

準備会世話会は当初19名によって構成され、1988年9月24日から1989年4月8日までの間に7回開催した。第1回は世話会申合せ事項、学会趣意書(第1版)の内容・準備会会費の金額・事務局の設置等について決めた。第2回は呼びかけ人・賛同団体の募集方法について検討した。第3回はニュースレター発行・実行委員会への改組を行い、会則・学会誌について検討を進めることを協議した。第4回は趣意書(第2版)、関西「連絡所」について検討した。第5回は関連団体・文部省・環境庁・マスコミ関係者との連絡のあり方、学会創立時期について検討した。第6回は呼びかけ人から広く委員を募り、実行委員会に改組し、会則検討委員会・学会誌検討委員会を設置することについて協議した。第7回はセミナー等、準備会としての企画について検討するとともに、世話会を実行委員会に改組することを決定した。

III. 実行委員会の活動

実行委員会は1989年5月20日から1990年5月19日までの間に12回開催した。第1回は学会誌専門委員会の委員委嘱、実行委員会協力委員について検討した。第2回は実行委員(14名)の確認、全国各地の協力委員(16名)を委嘱すること、創立大会について協議した。第5回野外教育シンポジウムを同実行委員会よりの申し入れにより、創立大会の関連集会として行うことを了承した。第3回は創立大会の具体的なスケジュール等について検討した。第4回は創立大会記念講演・シンポジウムのテーマと演者について検討した。規約専門委員会・学会誌専門委員会の審議経過について報告を受けた。第5回は引続き創立大会の内容について検討した。第6回は記念講演の演者を決定、拡大実行委員会開催・創立大会実行委員会設置について協議した。第7回は創立大会実行委員会設置、シンポジウムの演者の決定、総会の内容・初代会長の選出方法等について検討した。拡大実行委員会では創立大会委員長の決定、関連集会・関東支部について協議した。第8回は創立大会のテーマ・準備について協議し、規約専門委員会の中間報告について検討した。第9回は学会規約(案)、役員選挙規定および創立時役員選挙規定(案)について了承した。これに基づき、選挙管理委員会設置を決め委員委嘱を行った。第10回は準備会会計監査の委嘱を決定、創立時役員選挙の実施方法および学会誌専門委員会の中間報告について検討した。第11回は創立時役員選挙の結果に基づき次期事務局体制への引継、総会次第と実行委員会報告要旨(案)について検討した。第12回は総会運営について最終打ち合わせを行った。この間、実行委員会の協議内容については「準備会だより」によって準備会員・呼びかけ人に報告した。

IV. 広報活動

1988年9月から本日まで1年半有余の日本環境教育学会設立準備作業において、設立趣意書は第3版まで総計6000部、準備会だより第7号まで総計12500部、呼びかけ人名簿第4刷まで総計6000部、創立大会案内2000部を印刷し、環境教育関連団体および個人に広く配布し、学会創立準備への参加・協力を呼びかけた。他方、四大新聞・NHKほか多数の新聞・雑誌等には学会創立案内を掲載し、情報の流通に協力していただいた。

実行委員会実行委員

阿部治(埼玉大学教育学部教育実践研究指導センター)、小川潔(東京学芸大学農学教室)、木俣美樹男(東京学芸大学野外教育実習施設)、杉浦高雄(せたがやトラスト協会)、瀬谷勝頼(東京学芸大学探検部)、田沢興光(せたがやトラスト協会)、東原昌郎(東京学芸大学保健体育学科)、中込卓男(東京都五日市町立戸倉小学校)、樋口利彦(東京学芸大学野外教育実習施設)、松本敏(明治学院大学文学部教職課程)、八田洋章(国立科学博物館筑波実験植物園)、山下宏文(東京都品川区立第2延山小学校)、宮本透(東京学芸大学附属養護学校)、渡辺隆一(信州大学教育学部志賀自然教育園)。

実行委員会協力委員

赤尾整志(大阪府立園芸高等学校)、植原彰(やまなしナチュラリストの会)、川口啓明(科学ジャーナリスト)、川嶋直(財団法人キープ協会)、狩山廣子(神奈川県公害センター)、菊屋奈良義(日本自然保護協会)、小澤紀美子(東京学芸大学家庭科)、新城和治(琉球大学)、谷口弘一(北海道教育大学教育実践研究指導センター)、橋本詔子(環境庁企画調整課)、福島達夫(日本福祉大学)、細山田三郎(鹿児島大学教育学部寺山自然教育研究施設)、山本友和(上越教育大学社会系)、鈴木善次(大阪教育大学理科教育)、三浦国彦(旭川市春光台中学校)、浜口哲一(平塚市博物館)。

規約専門委員会(委嘱委員)

牛山積(早稲田大学法学部)、河村重行(田園調布双葉小学校)、花園かをり(文京大学)、山岡寛人(東京大学附属高等学校)

学会誌専門委員会(委嘱委員)

柴田敏隆(ナチュラリスト)、進士五十八(東京農業大学)、本谷勲(東京農工大学)、山田卓三(兵庫教育大学自然系)、提達俊(横浜市市ヶ尾小学校)

第10回 環境教育セミナー

期日：1991年8月

テーマ：環境教育事業としての農山村エコミュージアム

主催：自然文化誌研究会（INCH）、東京学芸大学野外教育実習施設（FSI）

後援：埼玉県大滝村、林野庁秩父営林署、（財）森とむらの会、（社）全国林業改良普及協会、（財）21世紀村づくり塾、（財）農村開発企画委員会。（社）国土緑化推進機構の助成による。

プログラム：

- ・はじめに 木俣美樹男（東京学芸大学野外教育実習施設）
- ・秩父地方の森林・林業について～奥秩父の国有林を中心に～：安部廣吉（秩父営林署長）
- ・教育的な活動の場としての農山村の役割と活用：筒井迪夫（東京大学教授）
- ・エコミュージアムと農山村の振興、西沢信雄（朝日町エコミュージアム）
- ・環境教育の現状と可能性：川嶋直（財・キープ協会）
- ・大滝村中津川周辺でのエコミュージアム：岡本達治（自然文化誌研究会）
- ・大滝村の観光文化資源の保全と開発：木村清（大滝村役場）

◎第1回野人養成講座：

- ・野人養成講座について～野人人生の楽しみ方：中込卓男（自然文化誌研究会）
- ・森林と人との新たな関わりについて～雑木林の過去と現在：中川重年（神奈川県林業試験場）
- ・埼玉の自然誌～山地帯の森林と林床の植物：大田和夫（埼玉県立自然史博物館）

文献：第10回環境教育セミナー～環境教育事業としての農山村エコミュージアム 資料集

第11回 環境教育セミナー

1993年 国際理解と環境教育

◎第2回野人養成講座

1993年 アイヌ文化にふれる：貝沢薫

◎第3回野人養成講座

1993年 太鼓と縄文土器：金子愛愛、星喜徳

第12回 環境教育セミナー

テーマ：市民が耕す農研究会『環境教育と農業』

期日：1994年1月23日

場所：東京学芸大学20周年記念館2F

内容：12:00～13:00 野外教育実習施設見学
13:00～16:00 研究会

参加者数：約20名

◎第4回野人養成講座

1994年 野焼きと栃餅づくり：金子愛愛

第13回 環境教育セミナー

期日：1994年4月29日～5月1日

場所：埼玉県秩父郡大滝村中津川 中津川キャンプ場内講堂

テーマ：農山村エコミュージアムづくりによる都市と農山村との交流

趣旨：日本のエコミュージアムやグランドワークの現状とともに、大滝村エコミュージアムの実践事例を報告する。農山村を環境教育のフィールドとして活用しつつ、環境保全や地域振興と両立させる有効な手段として注目されているエコミュージアムについて議論を深める。

後援：林野庁・秩父営林署、埼玉県大滝村

参加人数：約40名

プログラム：

◎4月29日

- ・基調講演「エコミュージアムの誕生」新井重三（丹青総合研究所）
- ・日本のエコミュージアムの事例と特色：加藤由美子（丹青総合研究所）
- ・大滝村の自然と文化：中込貴芳（自然文化誌研究会）

◎4月30日

- ・基調講演「エコミュージアムとしての林業の活用」鶴見武道（千葉県立茂原農業高等学校）
- ・日本におけるグランドワークの動向：吉田一良（エコライフ研究所）
- ・雑穀で村おこし：斎藤吉五郎（群馬県甘楽町雑穀をつくる会）
- ・報告会「大滝村エコミュージアム」岩谷美苗（自然文化誌研究会）

中津川地区親交会の復活：山中新一（中津川親
交会）

・懇親会

◎5月1日

・全体討議「これからの日本のエコミュージアムを考える」秩父エコミュージアム研究委員会

第14回 環境教育セミナー

期日：1995年6月9日～11日

場所：大滝村中津川、大滝グリーンスクール

テーマ：環境教育の場としてエコミュージアム
を考える

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、(財)
森とむらの会、自然文化誌研究会、環境文明
研究所

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、林野庁・秩
父営林署

プログラム：

◎6月9日：オプションプログラム

・環境教育アクティビティ体験：森良（ECOM
代表）

・中津の自然と文化にふれる会：岩谷美苗（自
然文化誌研究会研究員）

・山村夜話：山中秀人（民宿ひげ主人）

◎6月10日

・エコミュージアムによる地域の環境文化の創
造実践エコミュージアムのすすめ：新井重三
（丹青研究所顧問）

・大滝村エコミュージアムの環境教育実践：小
川博久（東京学芸大学環境教育実践施設長）

・パネルディスカッション：

コーディネーター＝加藤三郎（環境文明研究
所長）／パネラー＝西沢信雄（山形県あさひ
町ナチュラルリストの家）、笹谷康之（立命館
大学）、市川平治（群馬県倉渕村議会）、永岡
賢治（広島県高宮町役場）、山中進（大滝村
中津屋主人）

・記念講演：「森林と農山村の未来を語る」高木
文雄（森とむらの会会長）

・基調講演「地域と学校を結ぶこれからの教育
システム」中野重人（文部省視学官）

◎6月11日

・子どもの知覚空間を広げる環境学習：寺本潔
（愛知教育大学助教授）

・生活体験を豊かにする環境学習・生活科：森
本直樹（大阪府八尾市立竹渕小学校教諭）

・教員養成における生活科カリキュラム：森茂
岳雄（東京学芸大学助教授）

・総合討論：地域と学校を結ぶエコミュージア
ムの展開に向けて

第15回 環境教育セミナー大滝

期日：1996年6月14日～16日

場所：埼玉県大滝村グリーンスクール

テーマ：みんなでつくろう新しい村のかたち

趣旨：日本の中でのエコミュージアム活動の
現状と課題の認識を深め、環境教育事業と地
域振興を融合した具体的な方策としてテレ
コミュニケーションを活用した農山村エコ
ミュージアムの普及・啓発を行う。

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、(財)
森とむらの会、自然文化誌研究会、エコクラ
ブ、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、林野庁・秩
父営林署、日本エコミュージアム研究会、日
本環境教育学会

対象：一般（約50名）

プログラム：

◎6月14日

・大滝村エコミュージアムワークショップ：竹
かご作り＝岡野卯太郎（郷土史家）、大滝村
郷土料理の夕べ＝大滝村くらしの会、スライ
ド上映「大滝村エコミュージアムでの実践」
自然文化誌研究会

◎6月15日

「みんなでつくろう新しい村のかたち」

・みんなで守るこれからの森林：園田安男（森
づくりフォーラム）

・女性が支えるエコミュージアム：萩原なつこ
（東横学園女子短期大学）

・デモンストレーション：ミクロネシアと通信
してみよう1、エコクラブ。

・グローブ計画の試み：和田勝行（文部省中学

校課)

- ・テレコミュニケーションによる樹のプログラム：刈宿俊文（港区応神小学校）

◎6月16日

「開かれた村のエコミュージアムへ」

- ・デモンストレーション：ミクロネシアと通信してみよう2、エコクラブ。
- ・総合討論：エコミュージアムとテレコミュニケーション

Asian-Pacific Environmental Education Symposium ~ Environmental Education and International Cooperation in Asian-Pacific Countries ~

Date: November 12, 1995

Place: Azabu Green Kaikan Hall (Tokyo, Japan)

Organized by GLOBE Japan and The Japanese Society of Environmental Education

Co-sponsored by the National Land Forestation Promotion Organization, Forest and Village Association, The Institute of Natural and Cultural History, Asian Environmental Education Forum, Pan-Asian Consortium for Environmental Education, and World School Japan

Supported by Ministry of Education, Science, Sports and Culture, and Forest Agency

Program:

Opening remarks; Prof. Minoru Harada, Country Coordinator of GLOBE Japan

Dr. Makoto Numata, President of The Japanese Society of Environmental Education

1. Environmental education in Japan. Mr. Satoshi Ichikawa, Naruto Kyoiku University.
2. Environmental education in Thailand. Mr. Siriwat Soondrotok, Rajabhat Institute Phranakorn.
3. Environmental education in Philippines. Dr. Merile C. Tan, University of Philippines.
4. Environmental education and campaign in Korea. Prof. Lee See-Jae, The Catholic University of Korea.

5. Environmental education in China. Dr. Quan Hao, China-Japan Friendship Environmental Protection Center.

6. Environmental education and computer communication in the World School Project. Ms. Takako Takano, World School Japan.

Discussion: Coordinator; Prof. Kazuhiko Nakayama, Tsukuba University.

Concluding remarks: Prof. Mikio Kimata, Tokyo Gakugei University.

文献：環境教育研究第6号：59-103. 1996.7.

第16回環境教育セミナー大滝

期日：1997年6月14日～15日

場所：埼玉県大滝村グリーンスクール

テーマ：農山村の教育力を見直そう！

趣旨：農山村の自然と文化を生かした体験的な環境教育活動の実践事例を紹介し、農山村エコミュージアムを活用した環境教育の具体的な展開方法を、広く一般に普及する。

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、(財)森とむらの会、自然文化誌研究会、エコクラブ、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、林野庁・秩父営林署、日本エコミュージアム研究会、日本環境教育学会

対象：一般（約60名）

プログラム：

◎6月14日

- ・さると人のくらし～猿害の現状と対策～：白井啓（野生動物保護管理事務所研究員）

選択実習：山村の自然を学ぼう！

- ・樹のお医者さんになってみよう：堀大才（財・日本緑化センター主任研究員）

- ・昆虫植物観察会：北野日出男（創価大学教授）

◎6月15日

- ・バードウォッチング：中込卓男（小金井緑小学校教諭）

選択実習：山村の文化に学ぼう

- ・職人の技 竹かご作り：岡野卯太郎（郷土史家）

- ・郷土食づくり：千鳥敬子（大滝くらしの会）

- ・刃物と山村の生活：山中秀人（民宿ひげ）

- ・子どもたちに伝えよう！山村の知恵；山村のくらしと環境教育、小川博久（東京学芸大学教授）、ディスカッション

International Symposium on Common Agenda of Environmental Education in the Global Age

Date: February 21-22, 1998

Place: National Olympic Memorial Center for Youth

Symposium session:

Keynote address and Special lecture.

1. Up-to-date situation of environmental education.
2. Subjects of environmental education for future community.
3. Role of environmental education in educational innovation.
4. Environmental education in Global age.

Poster session:

Post International Symposium Program:

Organizing Committee:

Sponsors: Ministry of Education, Science, Sports and Culture, The Japan Foundation, The National-Land Afforestation Promotion Organization, and AEON Group Environmental Foundation.

Supporting Organization:

文献：International Symposium on Common Agenda of Environmental Education in the Global Age, ed. by Mikio KIMATA and Makiko KANODA, 1998.

第17回 環境教育セミナー大滝

期日：1998年6月13日～14日

場所：埼玉県大滝村グリーンスクール

テーマ：専門的な視点を学ぼう

趣旨：農山村エコミュージアム内に点在する自然や文化の環境教育教材を環境学的、専門的な視点から再検討し、そのプログラムを実践・展開することで、体験型環境教育の新たな手法として広く一般に普及啓発する。

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、(財)森とむらの会、自然文化誌研究会、エコクラブ、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、林野庁・秩父営林署、日本エコミュージアム研究会、日本環境教育学会

対象：教員、一般、学生、主婦、大滝村の方、関心のある方ならどなたでも（約100名）

プログラム：

◎6月13日 選択実習（弁当持参）

- ・大滝村の巨樹・古木を見に行こう～樹木医さんの木の見方～：堀大才（財・日本緑化センター主任研究員）
- ・藍染実習～楽しい染色の文化～：鈴木美穂（手工芸家）
- ・竹籠作り～自分の竹籠を自分の手で～：岡野卯太郎（大滝村郷土史家、竹籠職人）
- ・スライド上映会「雑穀の起源を求めて」木俣美樹男（東京学芸大学環境教育実践施設）

◎6月14日

- ・バードウォッチング：中込卓男（小金井市緑小学校教諭）

選択実習

- ・大滝村の土を見る、土を知る～土が私たちに教えてくれること～：樋口利彦（東京学芸大学環境教育実践施設）
- ・自然観察のすすめ～森にひそむ生き物たちを通して：山田卓三（名古屋自由学院短期大学）
- ・自然の中での写真の撮り方：菊池知義（動物カメラマン）
- ・雑穀～日本の伝統食から世界をつなぐ～：木俣美樹男（東京学芸大学環境教育実践施設）

第18回 環境教育セミナー大滝

期日：1999年6月12日～13日

場所：埼玉県大滝村 大滝グリーンスクール

テーマ：エコミュージアムを活用した環境教育の実践

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、自然文化誌研究会、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、日本エコミュージアム研究会、日本環境教育学会

協力：東京都環境学習リーダー

対象：教員、学生、主婦、大滝村民、関心のある方（64名）

プログラム：

◎6月12日

選択実習

- ・里山の昆虫観察
- ・環境美術の親しみ方～大滝村でアートする
- ・大滝村の郷土料理～村人との楽しい語らい
- ・竹籠作り
- ・スライド上映「奥秩父の動物たち」

◎6月13日

自由参加「大滝村の野鳥観察」

選択実習

- ・自然の中での写真の撮り方
- ・大滝村の土を知る
- ・自然のものをもっと食べよう
- ・土の中から木を観察する

全体会「これから私たちが大滝村でやりたいこと」

第19回 環境教育セミナー大滝

期日：2000年6月10日～11日

場所：埼玉県大滝村中津川地区および大滝グリーンスクール

テーマ：エコミュージアムを活用した環境教育の実践

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、自然文化誌研究会、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、日本エコミュージアム研究会、日本環境教育学会

協力：彩の国ふれあいの森管理事務所、東京都環境学習リーダー

対象：小中高教員、教育・研究・行政機関関係者、学生、その他一般

プログラム：

◎6月10日

大滝村エコミュージアム観察会（選択実習）

- ・鉄砲堰見学とシオジの原生林コース
- ・大滝村の昔ながらの生活文化体験コース
- スライド上映会「ボルネオの昆虫」

◎6月11日

自由参加「早朝探鳥会」

選択実習

・山村の自然と文化を題材にした総合学習の実践

座談会「大滝村エコミュージアムの明日を考える」

第20回 環境教育セミナー

期日：2001年5月12日～13日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

テーマ：どう発展させよう、これからの環境教育・学習センターの環

協力：タイ日本自然クラブ（TJ Club）、東京都環境学習センター、財団法人森とむらの会

参加者数：48名

プログラム：

◎5月12日

13:00～13:30 あいさつ 小泉武栄（環境教育実践施設）、上飯坂實（財団法人森とむらの会）

13:30～17:00 なぜなぜシンポジウム

コーディネーター 樋口利彦（環境教育実践施設）

・なぜ、昆虫が好きなのか？ 北野日出男（創価大学）

・なぜ、植物が好きなのか？ 阪本寧男（龍谷大学）

・なぜ、環境教育を始めたのか？ Laddawan Kanhasuwan（Rajabhat Phuranakon University）

17:00～18:00 夕食

18:00～20:30 車座シンポジウム

◎5月13日

9:00～12:00 いろいろワークショップ

・サイチョウと遊ぶ

・タイ料理作り

・ラジャバト・プラナコン大学との交流

・パン作り

12:00～13:30 昼食交流会

13:30～14:00 環境教育実践施設の案内

第21回 環境教育セミナー

期日：2003年5月17日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

テーマ：焚火を囲みながらアイヌ文化を語ろう

共催：自然文化誌研究会

内容：北海道浦河町出身の浦川治造さん（東京アイヌ協会会長）の感受性豊かな子ども時代に大自然の中で遊び呆けた頃の語りとともに、トノキヤキトロビなどアイヌの伝統料理を味わった。

第22回 環境教育セミナー

中止

第23回 環境教育セミナー

期日：2005年2月19日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

テーマ：「太陽人」として生きる～ラコタ・ピースガーデン・プロジェクト～

共催：NPO 法人自然文化誌研究会、ミレットコンプレックス

内容：拡大家族としての付き合いから学んだ、アメリカ先住民ラコタ・スー族の伝統的な智慧の世界。「すべては繋がっている」という「地球の守り手」としての彼らの世界観を、現代のホリスティックな科学・哲学によって新しく捉え直し、「平和の文化」を気づく道を探るため、具体的な事例として「ラコタ・ピースガーデン・プロジェクト」が紹介された。また、NASAのSun-Earth Dayの教育用映像ツールなどを用いて、共通分母としての「太陽」に光をあてた話がなされた。ラコタ族の伝統的な祈りの歌と演奏とともに参加者との交流が図られた。

第24回 環境教育セミナー

期日：7月23日

場所：東京学芸大学附属環境教育実践施設

対象：高校生以上

プログラム：

13:30～16:30 話題：1) 自然観察と水彩画の実技、
2) オーロラと火山の話：田中千尋（お茶の水女子大学附属小学校）

16:30～ 懇親ビアガーデン（カンパ制）

第25回 環境教育セミナー

期日：2006年6月18日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

共催：NPO 法人自然文化誌研究会、東京学芸大学環境教育実践施設

プログラム：

13:00～15:00 話題：TJクラブ（タイ・日本自然クラブ）の活動を振り返り、タイの自然や環境文化を紹介する

・現地で収集した生活文化に関する資料や、共同開発した環境学習教材、環境教育資料などの展示も。

終了後 懇親会（国分寺のタイ料理レストラン）

第26回 環境教育セミナー

期日：2006年12月2日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

テーマ：ELF環境学習プログラムとは～より活躍できる環境学習指導者をめざして～

趣旨：あなたは、環境学習指導者に関する何かの資格をお持ちですか？それを活かした活動をなされていますか？

環境学習プログラムに関する初級指導者は全国に30万人ほどいるとされています。その多くはペーパーライセンスとなっているのかもしれませんが。これは活躍の場が少ない、スキルアップのための研修機会が少ないなどによると思われます。専門的な環境学習指導者をめざす人を取りまく状況はあまりよくありません。

そこで、現在、自然文化誌研究会は東京学芸大学環境教育実践施設と共同で実施してきた公開講座などの経験に基づいて開発してきたELF環境学習プログラムをもとに、秩父多摩国立公園を中心に活躍する中堅指導者養成研修会を準備しています。今回は、ELF環境学習プログラムの基礎的な考え方とその実践例をご紹介します。また、参加者のみなさんといっしょに、環境学習、環境保全、環境創造を実践的に指導でき、また企画運営ができる専門職業人をめざして、なにが現在、必要かを考えたいと思います。環境学習指導に関わる多くの方々のご参加をお待ちします。

主催：NPO 法人自然文化誌研究会

後援・協力：東京学芸大学環境教育実践施設、山梨県小菅村、小菅村教育委員会、小菅村観光協会、小菅村商工会、(財)水と緑と大地の公社、小金持ち工房、100%自然塾、小金井市教育委員会、国分寺市教育委員会、東京学芸大学サークルちえのわ

定員：50名

プログラム：13:00～17:00

- ・講義「ELF環境学習プログラムとはなにか？」中込卓男（自然文化誌研究会）
- ・事例報告：「植物と人々の博物館」展示プロジェクト 井村礼恵（東京学芸大学）
- ・ワークショップ：より活躍できる環境学習指導者をめざして～ELF環境学習プログラムの活用

**東京学芸大学 現代GP講習会／連続講演会
～エコミュージアム日本村、「植物と人々の博物館」づくりをめざして～**

1. 雑穀栽培講習会（第6回）

期日：2006年8月28日～29日

場所：小菅の湯体験農園内見本畑、中央公民館内植物と人々の博物館ほか（小菅村往復のバスは東京学芸大学発着）

対象：学生15名、市民15名、その他一般20名

内容：1) キビの収穫と防雀網掛け

2) キビのお菓子作り

3) 博物館の民具の整理、展示

2. 講演会

期日：2006年10月21日～22日

場所：小菅村中央公民館内植物と人々の博物館ほか（小菅村往復のバスは東京学芸大学発着）

対象：学生20名、市民20名、その他一般60名

内容：

◎10月21日

13:00～14:00 特別講義「アッサム農山村の生物文化多様性」S.パンダ（カルカッタ大学）

14:00～17:00 調査研究報告「多摩川上流・鶴川流域の生物文化多様性保全」

- 1) 雑穀類の遺伝侵食と多様性の現地保全：木俣美樹男（東京学芸大学）・石川裕子（京都大学）

- 2) 野生動植物の生物文化多様性の保全：井上典昭（大月短大附属高校）・井村礼恵（東京学芸大学）

- 3) 雑穀の地域社会史：増田昭子（立教大学）
研究報告：キリスト教の信仰と香草木：大澤由実（ケント大学）

◎10月22日

9:00～11:00 ワークショップ（事例報告）

- 5) エコミュージアム日本村構想：木俣美樹男（東京学芸大学）

- 6) 東京の森林林業と農山村：小机篤（東京都林家）

- 7) 小金井市における江戸野菜の復活：土井利彦（NPO法人ミュゼダグリ）

- 8) 小菅村における農山村エコセラピー：中田無双（エコセラピー研究会）

11:00～12:30 / 13:30～15:00

- 9) 分科会と全体会

主催：植物と人々の博物館

共催：東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員会、小菅村

協力：(財)水と緑と大地の公社小菅の湯、多摩川源流研究所、NPO法人自然文化誌研究会、NPO法人ミュゼダグリ、(財)森とむらの会、100%自然塾、小菅村エコセラピー研究会、ふるさと長寿館、土よりのたまり場、小金持ち工房、小菅村商工会、小菅村観光協会、北都留森林組合、北都留農業改良普及所

後援：日本有機農業研究会、雑穀研究会、とうきゅう環境浄化財団、(社)国土緑化推進機構、農林水産省ほか

文献：多摩川エコモーション報告書2006年度

第27回 環境教育セミナー／東京学芸大学現代GP講演会「植物と人々の博物館づくり さく葉標本庫一般公開とセミナー」

期日：2007年6月16日

場所：環境教育実践施設多目的室

講師：武井尚（さく葉標本庫の整備者、環境施設共同研究員）、山田卓三（植物と人々の博物館名誉館長）、山田益男（東京さく葉会）、岩槻邦男（東京大学名誉教授）

東京学芸大学 現代 GP : We Love Tamagawa い のちをつなぐ 138 ~ 第 1 回 多摩川エコミュ ジウム・ネットワーク・シンポジウム ~

期日：2007年11月16日~17日

場所：東京学芸大学講義棟 S410 他4階全フロア、環境教育実践施設多目的室、彩色園など

趣旨：学生・市民が一緒になって多摩川をめぐるエコミュジウムに蓄積された知恵を共有し、流域住民に広く伝え、上・中・下流の人々の環境学習活動をつなぐ。

主催：東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員会、植物と人々の博物館プロジェクト

協賛：山梨県小菅村、小菅村教育委員会、(財)水と緑と大地の公社、多摩川源流研究所、小菅村観光協会、小菅村商工会、100%自然塾、エコセラピー研究会、小金もち工房、(特) カッセ KOGANEI 市民起業サポートセンター、(特) ミュゼダグリ、小金井市環境市民会議、とうきゅう環境浄化財団、(財) 森とむらの会、(財) 森林文化協会、(社) 国土緑化推進機構、(特) 全国水環境交流会、(特) 多摩川エコミュジウム、(特) 環境文明 21、(特) ECOPLUS、(特) 自然文化誌研究会、北都留森林組合、(特) 環境文化のための対話研究所

後援：日本エコミュジウム研究会、東京都奥多摩町

プログラム：

◎ 11月16日 18:00 ~

プレシンポジウム「野外環境学習活動について、じっくり語り合おう」高野孝子 (エコプラス代表理事)

◎ 11月17日 10:00 ~

開会の挨拶：実行委員長 古橋源六郎 (財団法人森とむらの会会長)、東京学芸大学 地域と連携した環境学習推進委員会委員長 村松泰子 (東京学芸大学副学長)、小菅村村長 廣瀬文夫 (全国源流の郷振興協議会会長)

全体会：1) シンポジウムの趣旨説明

2) 多摩川をめぐるエコミュジウム活動の現場からの話題提供

展示：個人や団体の活動や研究をポスターなどで展示発表し、人々の出会いと活動経験を交

流する

分科会：多摩川の自然をめぐる展開されているいろいろな文化活動の経験を交流し、じっくり話し合う

1) 多摩川流域の生き物と川遊び；川や川原での遊び、河川敷の利用の仕方などについて、多摩川流域で生きる生物やこれをめぐる生物文化多様性の保全、外来生物の制御などについて

2) 山村の暮らしと産業振興；山村の生活をめぐる農林水業や観光業などの経済活動の実情をふまえて

3) 多摩川流域のまちづくり；環境保全、災害防止、景観を考えたまちづくりについて体験に基づいて考える

4) エコミュジウム・ネットワークづくり；多摩川流域住民や市民活動団体の連携、エコミュジウム活動の協働組織づくりについて

全体会：各分科会のまとめ報告を聞いて総合的な話し合いをする

交流会：遠くから参加の学生の皆さん向けに2泊3日のテント村を設営 (広域避難所体験を兼ねて)

文献：多摩川エコモーション報告書 2007 年度

第 28 回 環境教育セミナー / 東京学芸大学 現代 GP 連続講演会 「冒険探検における環境学習について、じっくり語り合おう」

期日：2008年11月4日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設多目的教室

話題提供：関野吉晴 (グレートジャーニー探検家、医師)、高野孝子 (エコプラス代表、早稲田大学准教授)

趣旨：冒険探検活動の成功と安全確保は、いかにして環境を学ぶかにかかっているに違いない。脆弱になった現代日本人が人生を生きていくために大切な冒険探検の好奇心と環境への向学心をかきたてたい。二人の気鋭の探検家から、厳しい世界で自由に楽しく生きることの意味、知恵と技能の源泉を聞き出してみたい。

主催：東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員会、植物と人々の博物館プロジェクト

共催：東京学芸大学冒険探検部、(特) 自然文化誌研究会、大学探検部連盟

協賛団体：山梨県小菅村、小菅村教育委員会、(財) 水と緑と大地の公社、多摩川源流研究所、小菅村観光協会、小菅村商工会、100%自然塾、小菅村エコセラピー研究会、小金もち工房、(特) カッセ KOGANEI 市民起業サポートセンター、(特) ミュゼダグリ、小金井市環境市民会議、とうきゅう環境浄化財団、(財) 森とむらの会、(財) 森林文化協会、(社) 国土緑化推進機構、(特) 全国水環境交流会、(特) 多摩川エコミュージアム、(特) 環境文明 21、(特) ECOPLUS、北都留森林組合、(特) 環境文化のための対話研究所、日本たばこ産業(株)

文献：木俣美樹男・服部哲則・井村礼恵・南道子・中西史、2011、プロジェクト学習科目「植物と人々の博物館づくり」の方法論と評価、環境教育 43：2-15

者と消費者との交流、地産地消および伝統的食文化の継承といった地域の食農教育を推進する。す。流域の人々とエコミュージアムをつなぐネットワーク活動をつくる。

主催：東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員会・植物と人々の博物館プロジェクト

協賛：山梨県小菅村、小菅村教育委員会、(財) 水と緑と大地の公社、多摩川源流研究所、小菅村観光協会、小菅村商工会、100%自然塾、小菅村エコセラピー研究会、小金もち工房、(特) カッセ KOGANEI 市民起業サポートセンター、(特) ミュゼダグリ、小金井市環境市民会議、とうきゅう環境浄化財団、(財) 森とむらの会、(財) 森林文化協会、(社) 国土緑化推進機構、(特) 全国水環境交流会、(特) 多摩川エコミュージアム、(特) 環境文明 21、(特) ECOPLUS、(特) 自然文化誌研究会、北都留森林組合、(特) 環境文化のための対話研究所、日本たばこ産業(株)

後援：農林水産省、環境省関東地方環境事務所、国土交通省京浜河川事務所、東京都、山梨県、昭島市、あきる野市、稲城市、青梅市、大田区、奥多摩町、川崎市、国立市、甲州市、小金井市、国分寺市、小平市、狛江市、世田谷区、立川市、丹波山村、多摩市、調布市、八王子市、羽村市、日野市、日の出町、桧原村、府中市、福生市、瑞穂町、三鷹市、武蔵野市、武蔵村山市、日本エコミュージアム研究会、日本有機農業研究会、(社) 農山漁村文化協会

プログラム：

◎ 11月14日

17:40～ プレシンポジウム座談会～食農教育から環境を学ぶ、じっくり語り合おう～

・コーディネーター：酒井文子（食育・野菜料理コーディネーター）

・話題提供：久保田裕子（有機農業研究会理事、國學院大学教授）、福田恵一（三鷹市立第六中学校教諭）

◎ 11月15日

9:00～9:15 開会の挨拶

・実行委員長 古橋源六郎（財・森とむらの会 会長）

環境教育学会小集会 2008

テーマ：環境学習原論、何が常に問われるのか？

目的・目標：

- 1) 人づくり：学習の目標、人を育む
- 2) 場づくり：学習の場、保全・創造活動の場
- 3) プログラムづくり：学習素材から目標達成の枠組み、教材、プログラム、カリキュラム
- 4) 保全・創造行動：学びの成果が行動につながり、環境が改善される

東京学芸大学 現代 GP : We Love Tamagawa いのちをつなぐ 138 ～第2回多摩川エコミュージアム・ネットワーク・シンポジウム～

期日：2008年11月14日～15日

場所：東京学芸大学芸術館

趣旨：学生・市民が一緒になって多摩川をめぐるエコミュージアムに蓄積された知恵を共有し、流域住民に広く伝え、上・中・下流の人々の創造的な環境学習の活動をつなぐ。子どもを中心とした農林漁業体験活動、農産物生産

- ・東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員 長 村松泰子 (東京学芸大学副学長)
- ・山梨県小菅村長 降矢英昭 (全国源流の郷振興協議会会長)

9:15 ~ 12:00 シンポジウム

1. シンポジウムの趣旨説明 木俣美樹男 (東京学芸大学教授)
2. エコミュージアムをめぐる NPO 活動の現場からの話題提供
 - ・コーディネーター: 土井利彦 (NPO ミュゼダグリ副理事長)・嵯峨創平 (NPO 環境文化のための対話研究所代表理事)
- 1) 「多摩川エコミュージアム: 川崎市」鈴木眞智子 (NPO 多摩川エコミュージアム事務局長)
- 2) 「江戸野菜の復活: 小金井市」納所二郎 (NPO ミュゼダグリ理事長)
- 3) 「エコミュージアム日本村: 小菅村」小島力 (小菅村エコセラピー研究会会長)
- 4) 「秩父まるごと博物館: 秩父市」中谷亨 (NPO ちちぶまるごと博物館理事長)

3. 総合討論

- ・展示 (期間中): 個人や団体の活動や研究をポスターなどで展示発表し、人々が出会い、活動経験を交流する

文献: 木俣美樹男編、2009、植物と人々の博物館一般公開記念解説書 p48、植物と人々の博物館プロジェクト

文献: 木俣美樹男、2009、持続可能な社会づくりのための環境学習活動報告書 2008 年度 pp.26-29、東京学芸大学

第 29 回 環境教育セミナー

期日: 2009 年 3 月 27 日

場所: 東京学芸大学環境教育実践施設会議室

テーマ: 今日のタイの環境教育

話題提供者: Dr. Chinatat Nagasinha (ラジャバト・プラナコン大学環境教育センター、バンコック)

趣旨: 同大学の環境教育センターはタイで最初にでき、日本で最初にできた東京学芸大学環境教育実践施設とは 10 年以上の学術交流協定を結んでいる。毎年、教員・学生の往来が

あり、環境学習共同キャンプを国立公園でしてきたし、卒業研究や教材開発も連携して実施した実績がある。交換留学もでき、大学院環境教育コースの講義 (客員教授) も引き受けてきた。

主催: 環境教育実践施設、NPO 法人自然文化誌研究会

日本エコミュージアム研究会全国大会

期日: 2009 年 11 月

場所: 神奈川県小菅村

文献: 木俣美樹男・井村礼恵・黒澤友彦、2010、第 15 回全国大会 小菅村~源流の村 小菅村=日本村: 生物文化多様性を紡ぐ~、エコミュージアム研究 15: 4-11

第 30 回 環境教育セミナー

話題: 生物文化多様性とアニミズム

期日: 2010 年 6 月 5 日

場所: 東京学芸大学環境教育実践施設多目的室

主催: 東京学芸大学環境教育実践施設、NPO 自然文化誌研究会

後援: 三菱 UFJ 環境財団、財団法人森とむらの会/植物と人々の博物館、小金井環境市民会議、CBD 市民ネット/人々とたねの未来作業部会

プログラム:

9:00 ~ 12:00 ポスター・セッション

13:00 ~ 17:00 シンポジウム・座談会

・コーディネーター 塚原東吾 (神戸大学教授)・吉富友恭 (東京学芸大学准教授)

13:00 ~ 13:15 挨拶: 木俣美樹男 (東京学芸大学教授): 東京学芸大学で 1984 年から、自然文化誌研究会冒険探検部 (昔) が環境教育実践施設 (今) と共催で始めたこの環境教育セミナーは、日本環境教育学会の源流です。このたびは、記念すべき第 30 回を迎えましたので、国連生物多様性年にちなんで、「生物文化多様性とアニミズム」を課題にとりあげました。人々は暮らしの中で多くの生物とともに生活文化の多様性を蓄積してきました。アニミズムもその一つと考えられ、この「自

然信仰」の有り様をとらえ直すことは、生物多様性保全と環境学習の本質につながると思われます。自然の現場でご活躍されている皆さまからいろいろな話題を頂き、ゆったりと話し合いたいと思います。

また、三菱UFJ環境財団の寄附講義「多彩なアプローチによる環境学習I」の一環として開催し、学生、市民の皆様に広く参加をお誘いすることにしました。せっかくの機会ですから、皆様の日ごろの環境創造活動を交流していただくために、午前の部はポスターセッションを、午後の部はシンポジウム・座談会および交流会として、じっくりお話ができるようにしました。

シンポジウムの趣旨説明

・塚原東吾（神戸大学教授）：アニミズムと生物文化多様性について、「近代的合理性」という概念を軸にした、歴史的考察：教の基層にあるものとして、近代的な合理性や理念化された宗教と対置されたものとして、ある意味で pejorative な表現としてに扱われてきた。より劣ったもの、より原始的なものが、ヨーロッパ近代の持つ「優れた」ものに対置され、(劣っていて、無根拠で、原始的で、わけのわからない) アニミズムによるとされてきた経緯がある。しかし、現実的に、生物文化多様性は、ある種のアニミズム的な世界観のなかで保持されてきている。生物文化の多様性とアニミズムには親和性が高く、(普遍的妥当性や標準化・画一化を標榜する) 近代合理性とは非親和的である。そのため、グローバル化の時代において、生物文化多様性は、まさに近代合理主義の極北にあるパテント(特許)の問題として、争奪戦(バイオ・パイラシーとさえ呼ばれる)の対象となっている。すでにパテントの争奪戦を行う側に、知的・文化的な優位性は全くなく(政治的・経済的にはもちろん圧倒的に優位である)、醜い戦場の様相を呈している。そのため、このようなバイオ・パイラシーへの参戦を促すことに対抗する戦略として、(同じ土俵で戦う、というのではなく、そもそも、同じ土俵

に乗らない戦略をとるために) アニミズムの立場を意識的にとることが、ある意味では有効ではないのだろうか。近代合理性の限界を超える意識的戦略としてのアニミズム、というのは、またある種の「もったいなさ」の発見でもある。

・吉富友恭（東京学芸大学准教授）：私たち人間の自然に対する意識や態度を、国内外に見られる宗教や民俗、風習等の様々な視点からとらえ直し、生物文化多様性について考えます。自然科学、教育、芸術など、各分野で活躍されている専門家の方々からのお話を楽しみにしています。

13:15 ~ 13:50 石の文化から見たアニミズムと生物文化多様性：須田郡司（石研究者、写真家）：日本各地、世界各地の「石」を巡る中で、これらの石に生物多様性に連なるアニミズムを感じてきました。この感動を共有したいと思います。

13:50 ~ 14:25 魚の生物多様性とアニミズム：中野正貴（フォトジャーナリスト）：近年、日本のサケ増殖事業では、資源の増大を目的に、人工ふ化放流を主体とした魚や川の徹底管理を行ってきた。確かにサケは増えた。しかしそれと引き換えに、古くからの「人とサケの多様なかわり」は失われつつある。

14:25 ~ 14:35 休憩

14:35 ~ 15:10 野鳥の生物多様性とアニミズム：安西英明（日本野鳥の会研究部長）：古今東西、信仰や習わし、お話やアートに登場する鳥たちから、生物多様性とともに関わり合いのありがたさと危うさを考えてみたい。

15:10 ~ 15:45 水田の生物多様性と虫見板：宇根豊（農と自然の研究所代表）：池の中の鮒は、池の中のことはよく知っているが、池の全容を外から見ることにはない。かつて日本語に Nature に当たる言葉がなかった理由である。この池が「自然」にあたる。現代人には池の中の鮒のまなざしが必要ではないか。

15:45 ~ 16:20 雑穀の生物文化多様性と神事：川上香（江戸東京博物館学芸員）：長野県飯田市上村で現在も継続されている、アワを用

いた作占いの事例を中心に発表し、他の地域での神事も取り上げつつ、アワ栽培やアワに寄せる人々の思いを紹介します。

16:20 ~ 16:30 休憩

16:30 ~ 17:10 座談会

17:30 ~ 19:30 交流会

文献：地域と連携する大学教育研究会編、地域に学ぶ、学生が変わる—大学と市民でつくる持続可能な社会、東京学芸大学出版社

第31回 環境教育セミナー

期日：2011年10月25日 10:30 ~ 12:00

場所：環境教育センター会議室

テーマ：気候変動・ピークオイルとトランジション・タウンの実践

話題提供者：ポール・シェファード

内容：大学院生共同研修会の一環として企画、実施し、タイ、日本およびイギリスの環境学習実践の交流をした。タイのラジャバト・プラナコン大学の教員、院生11名のほか、学大の教員、院生、学生ら15名が参加した。

環境学習シンポジウム

日時：2012年2月18日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター セミナーホール417室

テーマ：環境教育学への新たな提案

主催：東京学芸大学環境教育研究センター、学部環境教育教室、大学院環境教育サブコース

共催：東京学芸大学学芸の森環境機構

後援：三菱UFJ環境財団、NPO法人自然文化誌研究会ほか

プログラム：

9:00 ~ 9:20 総合司会 松川誠一（東京学芸大学準教授）

・挨拶 高田滋（東京学芸大学環境教育研究センター長）

・趣旨説明 木俣美樹男（東京学芸大学学芸の森環境機構長）：「環境科」カリキュラムの構図と学芸の森環境機構の「環境+教育」戦略

9:30 ~ 12:00 環境科カリキュラムの必要性を探る

座長 = 鈴木善次（大阪教育大学名誉教授）、市川智史（滋賀大学環境総合研究センター准教授）

1) 持続可能な社会の構築につながる環境学習～学びから行動へ、個人から社会へ：藤村コノエ（NPO法人環境文明21共同代表）

2) 地域に根ざした環境教育のモデル～新潟県南魚沼における「場の教育」の実践から：大前純一（NPO法人エコプラス事務局長）

3) 小学校での環境学習実践：中込卓男（八王子市立上巻分方小学校教諭）

4) 児童・生徒の生物多様性保全認識の向上のための学社融合カリキュラム～韓国（洪城郡洪東面）プルム実践からの学び：降旗信一（東京農工大学准教授）

5) 環境教育学、次のステップへ：渡辺隆一（信州大学教授）

12:00 ~ 13:30 ポスター・セッション：「環境+教育」研究・実践、GLOBEプログラム、植物と人々の博物館プロジェクト他の展示

1) 初等教育における環境教育の変化について—教材等の調査をふまえて—：土井美枝子（広島大学大学院社会科学研究科博士課程後期生）

2) 特別支援学校の農作業学習と環境教育：佐野守平（埼玉県立深谷はばたき特別支援学校）

3) 環境学習プログラムによる河川の捉え方の変容～河川の描写分析を中心に～：丸山瑛奈（東京学芸大学大学院環境教育サブコース）

4) 水辺の古写真を素材としたデジタル・アーカイブ教材の開発と評価～中国杭州西湖を対象として～：方華（東京学芸大学環境教育サブコース）

5) 学芸の森環境機構、環境改善企画部門地球温暖化対策プロジェクトおよび環境調査評価部門環境報告書ワーキング・グループの活動内容について：堀雅臣・栗林猛（東京学芸大学施設課）

6) 自然保全ボランティアによる環境教育活動が自己の活動意欲・継続に及ぼす影響：齊藤愛子（東京学芸大学大学院環境教育サブコース）

7) グラウンデッド・セオリーを用いたエコスタイルの教育的意義に関する研究～学校生活

- と教育活動における影響を中心に～：秦範子（東京学芸大学大学院教育学研究科）
- 8) 戸川幸夫動物文学の源泉と、自然観の追求～山形を舞台にした人物研究と作品分析を中心に～：新沼溪（東京学芸大学大学院環境教育サブコース）
- 9) 環境のための地球学習観測プログラム（GLOBE）：吉富友恭・深須祐子・神村佑（東京学芸大学グローブ日本事務局）
- 10) 自然文化誌研究会の環境学習活動：中込卓男・黒澤友彦（NPO 法人自然文化誌研究会）
- 11) ちえのわ農学校の活動：北翔一（東京学芸大学・サークルちえのわ代表）
- 12) ミクロコズムにおける Cyclopoida（ケンミジンコ類）の微小生物環境：更田暢宏（鳥取県琴浦町立赤碕中学校）
- 13) 丘陵地におけるアカマツの残存・衰退傾向とその要因検討～狭山丘陵でのアカマツを事例として～：横山伸夫（東京学芸大学大学院環境教育サブコース）
- 14) 「『心の芯』を耕す環境教育の体験学習プログラム」開発研究プロジェクト：原子栄一郎（東京学芸大学環境教育研究センター）
- 15) ごみ減量化団体「青空教室」の実践－小金井祭でのごみ減量化を目指して－：神村佑・齋藤愛子・中田ひか理・二ノ宮真理恵・小山田和代・村上秀行
- 16) 学芸の森プロジェクトの活動：真山茂樹（東京学芸大学広域自然科学講座）
- 17) 植物と人々の博物館プロジェクト：井村礼恵（植物と人々の博物館）
- 18) エコミュージアム日本村における植物と人々の博物館の展示活動：木俣美樹男・川上香・黒澤友彦・井村礼恵（自然文化誌研究会／植物と人々の博物館イニシアティブ）
- 13:30～17:00 新たな環境教育学への提案
座長＝安藤聡彦（埼玉大学教授）、松葉口玲子（横浜国立大学教授）
- 1) 東京学芸大学の環境教育のパイオニアワークに触発されて変貌する私の教育研究：原子栄一郎（東京学芸大学教授）
- 2) 地域と連携する大学教育と環境教育指導者

- 養成：樋口利彦（東京学芸大学教授）
- 3) 私の学び～自然保護教育からまちづくりまで～：小川潔（東京学芸大学教授）
- 4) ジオパークによる自然史教育：小泉武栄（東京学芸大学教授）
- 5) 河川環境の学び方、伝え方：吉富友恭（東京学芸大学准教授）
- 6) 農山漁村の生物文化多様性から学ぶ：木俣美樹男（東京学芸大学教授）
- 17:00 挨拶 山本克明（三菱 UFJ 環境財団理事）
- 17:30～20:00 懇親会
文献：環境学習シンポジウム要旨集

第32回環境教育セミナー

期日：2013年3月9日 9:30～12:30

場所：東京学芸大学環境教育研究センター多目的教室

テーマ：都市で耕し、食べ物を作る

趣旨：都市農地の保全の在り方、有機農業などの農法、市民農園の拡大の方法、ホームガーデン自給農耕、在来野菜やその郷土食の保全継承などによる、家族や地域レベルでの食料安全保障および生物文化多様性保全について話し合う。

主催：東京学芸大学環境教育研究センター、ホームガーデン研究会

共催：NPO 法人自然文化誌研究会、小金井市環境市民会議

話題提供者：

- 0) 木俣美樹男（ホームガーデン研究会）：話題設定についての趣旨説明
- 1) 末村成生（トランジション・タウン藤野、お百姓クラブ）：地元の畑を借用して、津久井大豆（地域固定種）や生姜を栽培、納豆や味噌づくりにも挑戦している。
- 2) 清水永一（瑞穂町の有機農家）：有機農法による市民農園を提唱している。
- 3) 藤賢治郎（小金井市民）：小金井市の生ごみのコンポスト化、これを活用する試験研究を市民として企画調整してきた。
- 4) 中村隆一（たんじゅん神奈川、農家）：農業

に転職し、今は炭素循環農法を実践している。

第33回 環境教育セミナー ホームガーデン研究会報告会～地域における食 料安全保障と生物多様性保全～

期日：2013年7月20日

場所：東京学芸大学環境教育研究センター多目的教室

趣旨：小規模自給農耕（山間地での農耕、有機農業、市民農園など）について各地の調査報告をする。東日本大震災直後の食料確保について当事者に聞く。都市と中山間地における農地保全、家族や地域での食料安全保障、生物多様性保全について話し合う。

主催：東京学芸大学環境教育研究センター、ホームガーデン研究会、NPO 法人自然文化誌研究会

プログラム：

9:30～12:00 / 13:00～14:30 調査報告

- 1) 地域における食料安全保障と生物多様性保全（東京都小金井市、山梨県小菅村、岩手県三陸を含む）：木俣美樹男（東京学芸大学環境教育研究センター）
- 2) パレスティナ、ナブラスのコミュニティーガーデン：大澤由実（European University Institute）
- 3) 宮城県気仙沼市大島の鳥っこ市：井村礼恵（鶴川女子短期大学）
- 4) 南アルプス山村の暮らしと食：川上香（江戸東京博物館）
- 5) 石川県白山麓地域の暮らしと在来品種の継承：西村俊（北陸先端科学技術大学院大学）
- 6) 埼玉県秩父盆地における農業の持続：佐野守平（埼玉県立はばたき特別支援学校）

14:40～15:50 現地の当事者による報告

- 7) 岩手県山田町における東日本大震災直後の炊き出し：木村良一（岩手県山田町農業委員会）

16:00～17:00 座談会（総合討論）